

六甲山のウォーキング

——神戸徒歩会の活動を主軸に——

中 島 俊 郎

日本の明治末期に起きたウォーキング運動と同時代ヴィクトリア朝英国において生起していたそれを比較してみれば、労働生活の余暇を愉しむ一環としてウォーキングが展開していたことを共通項として認めることができる。日本でも英国においてもレジャーとしてのウォーキングが軌を一にして行われ、盛隆をむかえていたのである。ただ、ウォーキング運動に一日の長がある英国では歩行のなかに政治性、社会性を強くにじませ、労働活動の一助として、また労働者の自己主張の媒体として使われるようになっていく。飼育する雷鳥を保護する名目で自分の土地への侵入を拒んだ地主側と、横断を強行しようとするマンチェスターの労働者たちが衝突してしまったキンダースカウト事件（1932年4月24日）は、「歩く権利」をめぐるまさに象徴的な事件であった。

産業化の波が押し寄せてきて都市化が濃密になりはじめた明治後期から大正にかけての神戸でもリクリエーションとしてのウォーキングは盛んになりはじめていた。そうした文化的な背景をもつ神戸市民は六甲山麓に対して独特の感情を抱きだしていたのである。「神戸徒歩会」の会員の一人がいみじくも表明しているように、神戸の背山は市民に精神的な慰藉を与えてやまない存在であった——「『市背の山々』、何と気持ちよき言葉だろう。私等は日々騒音の巷に^{あくせく}齟齬として無趣味なる雑務に追われ、時としては気倦み神疲れて如何に真面目ならんとするも能わぬときがある。が一度足を延ばして市背の翠巒^{すいらん}に登り清澄なる大自然の懐に入ると忽ち頭脳を清新にして、所謂無我の恍惚境に救われることが出来る。私等は此の大自然の恩恵に感謝すると共に大に山野の跋涉^{ぼっしょう}にいそしみ心身練磨に資せねばならぬ。態々^{わざわざ}息苦しき汽車や電車に揺られて遠く出かけるにも及ぶまい。寔に^{まこと}「市背の山々」は吾等に結構な慰安所であります。近頃背山も大分俗化したという批評を時々耳に致しますが本会の洗練されたコースによれば時には半日歩いても人影を認め得ぬ様な幽邃^{ゆうすい}境もあるのであります」（福井庄之助「市背の須磨丘陵から」『ペデスツリヤン』第95号〔昭和3年1月〕）

とあるように、六甲山はまさに別^{べっこん}懸境でもあったのだ。〔以下、ルビはすべて筆者による〕

これまで市背のウォーキングについては、神戸居留地から派生した六甲山の文化史、スポーツ史の一環として数多く研究、紹介され、研究対象として論じられてきた。だが、最古の神戸徒歩会の実態、とりわけ会を支えていた精神性の内実についてはほとんど追究されてはこなかった。つまり主催者がどのような思想を包摂しながら、ウォーキング運動を展開していったのか、といった根本的な問題が看過されてきたわけである。そうした欠を補うべく本稿では、六甲山におけるウォーキングが神戸徒歩会という散策会とその主催者である塚本永堯^{ながたか}の思索を通じて、いかに展開していったかを検討し、同時代に陸続と起こった徒歩愛好会の実態をも重ねながら、その精神性の在り処を追究してみたい。

I 神戸徒歩会の活動

神戸徒歩会は、明治43年11月19日、塚本永堯ほか四名の発起人によって創立された「神戸草鞋会」を母体

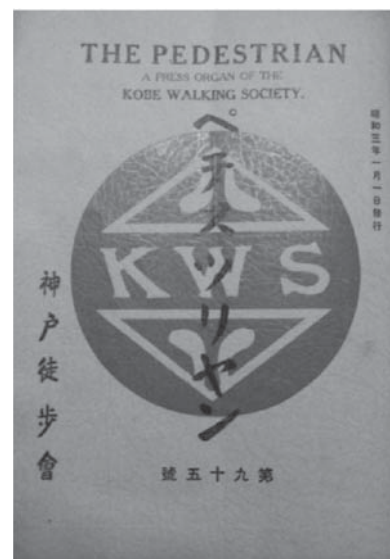


図1 神戸徒歩会『ペデスツリヤン』（第95号〔昭和3年1月1日〕）表紙

とする。翌年、神戸草鞋会は神戸徒歩会と改称された。

神戸徒歩会の活動実態はその会則によく表れている。「本会は神戸徒歩会と称し英語にて The Kobe Walking Society と呼ぶ」(第一条)とある。そして第二条として「本会は土曜日(午後のみ)日曜日或いは祭日を選び毎月一、二回、主として神戸市背後の山野を跋涉し勝地を探り半日或いは一日の清遊を試み以て登山趣味を涵養し心身の錬磨に資すると同時に一般登山者の便宜を計るを以て目的とす」と会の趣旨を旗幟鮮明にしている。ただ、前半にある開催される期日については注意を要するであろう。週末の午後、休日が当てられていて、休息日の活用が大前提となっている。そして、「神戸市背後の山野を跋涉し勝地を探り半日或いは一日の清遊を試み以て登山趣味を涵養し心身の錬磨に資する」と謳う後半は、神戸の裏山における散策の精神性を強調している——つまり休息日を活用して登山趣味を追究することで、肉体と精神のバランスをとることこそ、「心身の錬磨」に資するというわけである。

さてここで、第三条をみると、この会は他の多くの散策徒歩会と著しく異なる質が判明する。曰く、「前条末項の目的を達する一手段として本会は山路の修繕及親切を為す」とある。この項目は前条の「一般登山者の便宜を計るを以て目的とす」という文言を受けるわけだが、山中の道を修理し、新しい道を敷設するという営為は、確かに一般の人々が山中を散策するのに欠かせないものであろう。神戸徒歩会が道を補修することを会の主なる活動目的にしていたことは、看過すべきではない。道路への補修費などは会費と寄付からまかなうわけだが、投入費用がかなりの割合を占めていたと言わねばならない。と言うのも、会報の報告では、「大正3年6月末までの1ヶ年間の山路新設費277円余、修繕費364円余」を費やしている。つまり合計すれば641円余もの大金を投入していることになる。そして翌年には「大正4年6月末迄1ヶ年間に新設費745円、修繕費377円余、其外半期には修繕費323円」というように、1445円余も費やし、その翌年には「大正5年中には新設費117円、修繕費27円、常雇人夫賃211円等」などの355円もの金銭を会から支出している。

では、神戸徒歩会が敷設した道はどれくらいの長さになっていたのだろうか——「総計延長48071間(22里9町11間)[ほぼ87キロメートル]の内、本会に於て新設したる道路延長は実に30248間(14里8間)[ほぼ55キロメートル]に及び総延長里程の六割五分弱を示し残りの8里9町3間は県道国道である。夫等新設の20町以上のものは天狗道30.63町、柿木塚より徳川

道をぬくと經由五毛摩耶堂の分岐点35.4町、パノラマ道21.72町、鍋蓋山麓の石標より防火線を射的場を経て大師道迄24.67町、天清園より城ヶ越經由神戸アルプスを県道長阪迄22.9町等で以下40口に明細に記載してある」とあるようにかなりの距離を誇るのである。

徒歩会がどれほど道に対して、愛着をもち、道造りを誇りとしていたかは、塚本道などに見られるように功労者の名前を道に冠して表彰するところにも表れている——「九月は多年本会発展上に格大の援助あり且つ先年塚本氏外遊中は会長代理として会務に盡瘁せられた故大迫武吉氏の一周忌に相当するので其功績を顕彰すると共に生前の厚恩を感謝する永久の記念として先きに本会が開鑿敷設して大正4年4月25日開通式を挙げた山田道から若草山に通ずる山路(延長22間15間)を大迫道と命名する事として9月2日に命名記念の遠足会を挙行了した」(「KWSの二十五年」, p. 12.) といった記述からも明らかである。

さらに別の記事から同様な記述を求め例証しておこう。「山路修繕事業に就いては毎月常雇人夫が各山路の手入りに従事したが其以外に別に工区を(1)徳川道(2)桜谷道(3)天狗道(4)生田川道(5)鍋蓋山道(6)天清園道(7)大迫道(8)黄蓮谷道(9)炭酸泉分水嶺を越え生田川上流(10)牛の背より鍋蓋山(11)鍋蓋山より平野谷(12)再度山裏道(13)烏原道(14)烏原谷より高座(15)極楽谷より西池道(16)苧川谷(17)布引道(18)学校林道(19)塚本道(20)高雄山布袋谷道(21)市ヶ原石垣の二十一区に分ち延人夫二百人、工賃四百円を以て森岡組に請負わして一般登山者に利便を謀る等数々の敷設をした」(「KWSの二十五年」, p. 15.) といった報告に接すると、神戸徒歩会が山道造営に多額の予算を注入して、いかに尽力したかがうかがえるのである。

そして大正十五年の^{へきとう}劈頭には七大計画なるものを発表した。つまり「活躍時代に累進せる本会は左記の計画を大胆に発表して以て本会の主義主張たる徒歩登山を基調として心身の錬磨を為さんと欲す。その獅子吼する処の宣伝と伴う処の實踐を以て闇迷なる現下の運動界と混沌たる社会に向かつて^{こうきざんぜん}光輝燦然たる一大光明を放ち至純なる吾徒の主義に誘導する事に努力し全力を竭して社会の為に奉仕せんと欲するものである」と檄して、「一、皇陵巡拝旅行 二、兵庫県下特建巡礼旅行 三、西国巡礼旅行 四、史蹟踏査臨地講演旅行 五、博物採集登山旅行 六、六甲百景写真展覧会開催 七、六甲百景写真帖刊行」(「KWSの二十五年」, pp. 18-19.) を列挙している。

ここで神戸徒歩会が六甲山における道路を敷設する活動を総括し、未来へ展望を託している方向性を一瞥しておきたい——「山路修繕事業は本年も従前通り施行予定の処昨年来の役員会で度々論議的となった、即ち本会事業中最大の費用を要するを以て一月の役員会で『外人側寄付金収入を本事業資金に当て工事を前後二半期に区別し施行の事』と決定したが予期の寄付金は得られなかった。尚又昨年八月の役員会で『市背山地開発に就き市当局に対し極力大運動会を開始する事』を決議し浅見氏を委員長として努力を続け遂に大正十四年十一月に稟請書を提出した。その概要は——

『神戸市現在の公園は東遊園、大倉山、湊川、諏訪山、会下山の五箇所総面積五万二千四十二坪にして市域全面積の約〇・八四パーセントに相当し之を欧米都市の約十パーセントに比較する時は宵壤しやうじょうの差甚敷感かんを感ず。[中略]、本会は明治四十三年創立して爾来十有五年の長月日に亘り会員の会費並に内外人の寄付賛助金は挙げて山路の新設及維持費に傾注し、其額実に数万円の巨費に達せり。[中略]、最近登山者激増して内外人併せて毎日数百乃至千名の多数に上り従て本会多年の苦心事業に成れる山路の破損も亦甚設せつに到る。よって本会亦常雇人夫を督して一層修理に努め一般登山者の便益を図るに力を致すと雖微力到底及ばざるに到る、元来市背山さんい稟は本市の誇りにして、一大公園たる資格を具備す水源涵養、風致保存、砂防工事保護、山火事防止等の諸点より看るも緊急適宜の施設を要せん。山路荒廢による登山者の危険は市民の登山を防止し保健上に影響ある可く依而向後は市費を以て山路修繕相成度』

旨を述べて本会山路図を添え岡田会長より黒瀬神戸市長宛送達する処があつて本年に及んだのであつた」とある（『KWSの二十五年』『ペデスツリヤン 25周年特集記念号』、p. 21.）。

確かに神戸徒歩会は市民の健康、精神性の向上を願う活動を推進してきたが、市当局の反応からは期待したほどの進捗が見られなかった。「吾が神戸市が六大都市中、もっとも遅れているのは保健に関する設備の不完全であると思われる。公園らしい公園を有せざる事、運動場らしい運動場の無い事、その他アウト・ドア・スポーツの何一つとして完備していない事は市民をして沈鬱しんいつに導き、正気を阻害し、病弱者を累増せしめたかの感が無いでもない」（『意義の深い本会の事業』

『ペデスツリヤン』第114号 [昭和4年11月])と当局の不備を声高に訴えている。

神戸徒歩会としては坪野市長時代から「広大な市背の丘陵に遊歩道を開拓」の「しやうよう愆しんをしん試み」てきたが、功を奏さなかったという。そこで徒歩会は、「内外人から苦慮して寄付を募り営々として市背の山間へ二十幾里の山道を開通せしめた外、美化作業として桜楓鑑賞樹を会員の寄付金で六千本という歴大な植栽しよくさいを実施し、常備人夫をして山路の修理と植林の保護に全力を傾倒し永年是に当たらしめた事は隠れたる一大功績として何人も否定する能はざる美挙であろう」と自らの実践活動を称揚する。この自負めいた言葉をもってしても、神戸徒歩会が活動の一大目標を市背にある山々の環境整備においていることが自明となろう。たとえば昭和3年には神戸市の教育課へ環境整備の一環として、「市背の山上に市営の休憩所を差当たり約五ヶ所程適当の位置に建設する事（高取、再度、布引、摩耶、須磨）但其他は必要に応じ漸次増設する事」、「山間の要所に公設便所を設置し風紀を保つ事特に婦人の為め設備を考慮されたき事」、「景勝の位置を選び各所に小亭を設け家族的の登山者に便宜を図られたき事」といった以上の3項目を申し入れ、市当局に「市背の山を理解し、市民の保健上、修養上、登山をもっとも必要と認め、その誘導、奨励に」尽力して欲しい旨を要望している。（『登山奨励策を語る』『ペデスツリヤン』第95号 [昭和3年1月]）

ただ、一方的な主張に偏ってはならないので、ここで神戸市当局がとった緑化政策にふれておかねばならないであろう。先に言及されていた「坪野」とは、第二代目神戸市長、坪野平太郎（在任1901-05年）である。1902年、坪野市長は、日比谷公園などを造園した東京帝国大学農科大学教授、本多静六に委嘱して六甲



図2 六甲山の散歩者（着物姿に皮靴を着用）
（善太郎茶屋の『外国人記録簿』）

山の植林計画を立案した。六甲山系の治水調査、砂防造林設計からはじめ、常緑樹と落葉樹、針葉樹と広葉樹を巧みに配合して、六甲山の季節の移ろいまでも考慮した植林計画を立てたのであった。本多による造林計画に基づき、市長が退任してからほぼ10年後には約600ヘクタール、334万本にもおよぶ造林が完成され、禿山も同然であった六甲山は秀麗な姿をたたえだしたのであった。

塚本永堯は外国人たちが六甲山上で路をつくる犠牲的な精神に感激し、自らも道路の造営に参画したいと願った、と言う。そもそも道をつくるのは人間の原初からの根源的な営みである。そうした営為に永堯たちを駆り立てた一端は、道そのものの本質にあるのではなからうか。道は居住の場ではないが、すべての人々が共有する場所であり、とどまることなく、どこへでも通じている。そして空間としての道は過去と同時に未来へものびていく。何も存在しない路面を凝視していると形なき可能性があるように思えてくる不思議な場である。文学作品において道が人生の比喩になるのも実に自然なことである。若き日の永堯たちは、六甲山の路なき道に自らを映していたのではあるまいか、まさに救道の道として――。



図3 再度山の山門（善太郎茶屋の外国人記録簿に描かれた水彩画）

さて、神戸徒歩会の活動ばかりか、神戸の文化史をも今日に伝えるうえで貴重な資料となっているのがその機関誌『ペデスツリヤン』である。『ペデスツリヤン』は大正2年10月1日に創刊号を出し、大正9年12月号にて財政難から休刊し、第57号、大正12年7月に再刊された。そして『ペデスツリヤン』には昭和2年まで日本語に加えて英語で書かれたページがあった。会員には英語圏のみならずイスラム圏の人々まで数多くを擁していたのである。「今や本会員は内外人会員七百に余り遠足回数四百二十三回、機関雑誌ペデスツ

リヤンは既に第七十九号を発行、又本会と趣旨を同じくする登山団体の数、百の垂んとするは実に盛んなりと云う可く之等皆本会の風を見て起これるものなるを思う時実に欣快に堪えざる所である」と『ペデスツリヤン』の記事にあるように、神戸ではこれまでに例がないほど、ウォーキングという活動に関心が集まり、実践されていたのである。

ではここで、外国人の目から見た活動の一端を確認しておこう。外国人会員のシェールが寄稿した「鍋蓋山の観月」という一文には徒歩会に共有された美意識が表れている。一行は大正12年10月24日の午後8時35分に鍋蓋山の頂上に立つ。見渡す限りの山々は「眠るが如く沈黙して聳えて」おり、「俯瞰せば遠近の燈火、此處彼處に点在して、賑やかな下界の夜の雑鬧を思わせる」と明暗の対照が鮮やかになる。「山に静かな秋の夜……月は厳然として高く空に懸り、その柔らかな恵みの光を地上に投げていた…暫く現実の醜悪は美化され、月に輝く万象の眺めは殆ど人間以外の観であった」と感慨を吐露する姿は、もはや月見を心の糧とした日本人と何ら変わりはない。

神戸徒歩会の活動は神戸にとどまっていたわけではない。たとえば永堯が1932年8月23日付けで徒歩会に寄せた英語の書簡（“Hotels here are beautifully built and managed. Have just come down to this place to meet Mr. Abraham, who took me to the castle of Chillon of Byron’s fame. Mr. A is on the Swiss tour. N. Tsukamoto.”）には、スイスの地にバイロンの詩で有名なシオン城を訪れ、会員同士が交流している姿をうかがうことができる。

会員同士が交流する場所として、会議を開催し登山活動や徒歩会活動の記録をとどめていた茶屋、休憩所の存在は重要である。再度山には藤の棚茶屋、善之助茶屋、善太郎茶屋、摩耶山には行者茶屋、鷹取山にはつるや茶屋、塩見茶屋、布引には櫻茶屋などがあった。神戸徒歩会と縁が深かったのは、善太郎茶屋である。そこに残された記録簿は皮で装幀されていて、登山記



図4 善太郎茶屋に残された3冊の外国人記録簿 [大正12年より大正15年]

録をはじめ神戸徒歩会の活動を垣間見ることができる。背には FUTATABI FOREIGN VISITORS BOOK と英語で刻印されている。1974年7月26日にポール・ドンボール氏から兵庫登山連盟へ寄贈された3冊が保存されているのだが、1913年からの登山記録が日々とどめられていて、再度山にある寺の山門を描いた鮮やかな水彩画(図3)までもが記録保存されている。会の多彩な活動をしのぶことができる。

次章では神戸徒歩会以後に設立された徒歩会についても言及しておきたい。というのも、大正後期から昭和初期にかけて神戸では大小合わせて100以上の徒歩会が群起していたからである。それぞれ特徴があるので比較対照することにより、神戸徒歩会の特異性をも逆に照射してくれるはずである。

II 林立する徒歩会

明治末期から大正中期にかけて、神戸には多くの徒歩会が組織化されつつあった。歩行に対してどのような目標を置かかによって、会の性格づけがなされていたのである。会の内実はその標語によって集約されているともいえよう。たとえば、「神戸楓桜會」は、「花霞に匂う時香雲棚曳く春の山／葉霜に染まる頃錦繡織りなす秋の頃／心の友の相率い登高の志を養わん」と高らかに謳っている。自然の四季が織りなされている標語からもこの会が自然を友として、自然に寄り添い愛好する姿勢がうかがえるのである。

「徒歩吟行作句楽會」の場合、「若しそれ山野に同行せん」と欲せば須らく歌え！芸術家の心もて」という標語から理解できるように、詩想とともに歩むことで、精神を豊かにしようとする目標を察知できよう。詩歌と歩行はもっとも結合しやすい要素であるのを考えれば、この会が主張する歩行の形態がおのずと浮かんでくる。「神戸野歩路會」となるとやや複雑な様相を呈してくる——「登れや／登れ／雲迄も／自然の女神は莞爾たり／あらゆる階級を超越してなる／智識階級登山團」とあるのだが、前半は「神戸楓桜會」などに代表される自然を謳歌する姿勢が顕著であるにしても、後半は階級を標榜し歩行における社会階層の問題を露呈している。それは同時代英国の歩行会が、きわめて社会階級に意識的であったのと酷似している。たとえば思想家レズリー・スティーヴン(1832-1904)が主導する「日曜日散策会」(Sunday Tramps)という隔週の休息日にウォーキング活動を行っていた歩行会は、会員がすべて知識人であり、あまたあふれる労働者階

級の徒歩会とは一線を画していた。

そして多くの徒歩会が歩行と旅行の両輪でもって運営されていたが、「日本サグロ會」本部の評語である「剛健質素／探勝旅行／山川悠々果てしなく我庭広し、天高し」とあるように、探勝旅行と並行していたのもこの時期の徒歩会の特徴といえよう。時たたず名所旧跡を探訪するだけでなく、登山、スキーへと活動を拡大、活性化させていき、やがて歩を海外まで延ばしていくようになる。

神戸は市背に雄大な六甲の峰を抱いているので、今日まで延々と続く「毎日登山」の伝統が育まれてきた。「鶏鳴一声／吾會員既に山に在り」(神戸鶏鳴徒歩會)、「雲雀は高く空に歌い／吾等は快よく地に歌う／少年気鋭」(神戸ヒバリ徒歩會)などの評語に、「鶏」、「雲雀」というような早起きを喚起する言葉が織り込まれていることから分るように、早朝登山を何よりも目的としていた。そして、「鷹取山を中心にして毎日登山！近畿の山川 行かざるはなし」(兵庫多加登會)、「再度…毎朝…登山 成績最良…登山の魁」(神戸海栄登山會)といった例に見られるように、きわめてそれぞれ地域性に富んでいる。

こうした林立する徒歩会のなかで、「日本アルカウ會」は、「剛健質素、天下の覇者」と誇らしげに自称するように、「古き歴史と実力とを有せる」、まさに神戸にある徒歩会の代表のひとつともいえる存在であった。「吾日本アルカウ會は、尚幾多の抱負を持つ。やがてこれを実現するや、ことごとく天下の模範となる筈である。會とか團とか相片寄らずして渾然として各同趣味者と協力して事業を進めたい。これ吾党の念願である」と理想を高らかに宣言している。「天下の模範」などという独りよがりな文言が気になるのだが、



図5 日本アルカウ會の六甲山縦走(『山岳美』)

自負の強さがなせるゆえであろうか。「アルカウ會の名も清く／汚れぬ道を踏み分けて／遊ぶ山路の春秋や／この命の泉あり」と會歌にもその精神性を強調している。

だが、この会は高揚した理念の宣言に相反して、「本會は山岳秀麗の境に趣味深き遠足を試みて心神を錬磨し剛健闊達^{くわんたつ}の氣風を興すを以て目的とす／以上目的の實行を容易ならしむるための毎月二三回隔日曜日に僅少な費用を以て主として近畿の山岳に登り其内一回は特に阪神手近の山野を選ぶものとす」(第1条)とあるように、自然のなかで心身を鍛えあげて、堅実な人間性を育成するといったきわめて現実的な実践を標榜している。歩行の場を神戸からさらに幾内に広げるが、あくまでも経費をかけずにウォーキングを愉しもうとする姿勢がうかがえる。そしてこれは神戸徒歩会にも見られることだが、精神を涵養するために図書室を完備する施策がよく見られた。会員が亡くなると遺族が故人の蔵書を所屬していた会へ寄贈する例を頻繁にうかがうことができる。同時に、「本會は前記のアルカウ趣味を鼓舞するため適時に関係ある各種の集會図書の刊行及歩行能力の認定等を行うものとす」とあるように、どの会も、自らの会の記録、市背に広がる山々の地図、ガイドブック、登山指南書や設立を祝う記念誌などが刊行されていた。大正2年、神戸徒歩会事務所から発行された絵葉書集 *Hills Behind Kobe* (『神戸背後之山』) は、光村印刷で製版されているが、表紙にはワーズワスの『逍遙篇』の一句(“Full many a spot/Of hidden beauty have I chanced to espy Among the mountains”)が引用されている。この引用文は、まさに神戸徒歩会の精神を凝縮していると言ってよい。

自然のなかで育まれる歩行であるゆえ、自然との共生こそがもっとも重要な課題になってくるのは言うまでもない。だから、「本會會員は平素親近の間にアルカウ趣味の普及を図ると共に役員たると否とを問わず會の進展に必要な助力献策を致さるべし本會會員は自然物を愛護し其美観を毀傷せんとする者ある時は現地に於いて注意を與えらるべし」(第6条)という条項に見られるように、自然に対して愛護精神をそぞうとする姿勢は当然といえば当然とも言えようか。

ただ歩行会がもつジェンダー性を考えると、「日本唯一の婦人登山旅行の會」である「日本婦人アルカウ會」はきわめて興味深い対象となる。まずは他の会と著しく異なるのは、入会資格が厳しく問われる点であろう——「一度臨時に参加せられたる後、會員の紹介にて申込書を送り入會を許さる一般婦人の臨時参加



図6 着物姿で六甲山に行く日本婦人アルカウ會 (『山岳美』)

を歓迎す」とある。仮入会した後で、さらに會員の推薦をえて正式に入會を許すという厳格さである。そして、「但し女学生は其家族の保護者と同伴することを要す」とし、「また顧問外の男子は拒絶す」として、異性の介入は絶対に許されない状態であった。またその服装にも注意がはらわれていた。「山に登り密林中を通過することもあれば軽装を旨とす華美高価のものは一回の汗にて使用に堪えざるに至れば質素にて洗濯に都合よき衣服を便とす」とあるように、あくまでも実用に資するような服装が求められて、華美な装飾は退けられ、質実という価値観が支配的であった。

こうした女性に対する規制は、肉体的には脆弱で精神が薄弱な存在であるとみなす女性性を強化する目的に向かい邁進していくところとなる——「虚弱なる身体の改造は山に行くにあり。薄志弱行の改造は坂に登り峯に達するにあり。都會の人の体格改造は郊外運動の隆盛にあり。優柔不斷無意味に過ごす習慣の婦人は努めて山靈にふれよ」と(『山岳美』, p.3)。文末の「山靈」という言葉には注意を向けざるをえない。ここでいう山靈とは、どうやら清新な空気、あふれる陽光、横溢する緑などが織りなす山の靈というような意味以上に特別なニュアンスを含んでいるようだ。

「山靈」という精神性は治癒的な威力までもつようになる。「家庭の煩瑣^{はんさ}より起こる頭痛は一日大自然に接すれば治す」という個人的な病の治癒だけにとどまらず、山岳が伝播する力は、その及ぼす精神力にあることを看破する——「高山峻岳の頂広く下界を瞰^{みおろ}す時の反省に優る修養なし」と。これは明治の文人たちが詩人ワーズワスの詩に求めた、山岳が放つ人間を律する道徳的な効用そのものである。またワーズワスの詩作が、歩行の賜物であったこともよく知られていた——「閑居狭きにあらずと雖、渠が詩の十中八九は放朗なる天地の中に吟じ成されぬ。渠は客の来るごとに、田園に誘い下りて、詩集の就^かり野徑^{やけい}を示すを例とせり。客の来りて、渠が詩作を窺^かわんとする毎に、家婢^ひは先づ其主人の書齋を示し、然る後遙かに邱下の野

を指して曰く、『那処が主人詩作の場』と」（宮崎湖處子『ラルツラルス』）、とあるように。

ただ、こうした精神性がナショナリズムの影に色濃く染められていくのはやはり時代性を反映しているとも言えよう。「元気あふるる国民の母たらんには須く山路に遊べ。国家の隆盛を維持せんと欲すれば須く健全の子を作れ。健全の子を生まんとせば月に一回山に親しみ徒歩を実行せよ」とあるように、きわめて限定された女性性が浮きあがってくる。日本婦人アルカウ會の「来たれ、歩め、登れ…」という勇ましい呼びかけは、結局、ナショナリズムの表明にすぎないものなのであろうか。また、昭和13年に提唱された、「国民精神総動員に対応して創始された青年徒歩旅行」の趣旨（「祖国を正しく認識させる」）と完全に一致するのは偶然であろうか（東京鉄道局『青年徒歩旅行』[昭和13年]）。

さて、今日では設立以来90年を経過し、やがて100周年を迎えようとする「神戸ヒヨコ登山會」の活動についても本章で言及しておきたい。

神戸ヒヨコ登山會の活動内容もまた、会則に忠実に反映されている。「本會は會員相互の体育奨励を主とし常に山野を跋涉し名勝旧跡を尋ね神社仏閣に参拝以て身体を練磨し精神の修養を図ることを目的とす」（第3条）とあるように、身体と精神の修行こそが一大目的であった。そのため、第5条には連続の歩行を推奨する規定が定められる。「本會は登山奨励の爲め、(イ)一箇年間に四百回以上(ロ)同 三百回以上(ハ)同 二百五十回以上(ニ)同 二百回以上(ホ)三箇年に九百回以上別に規定あり各記念章を贈呈す。但し採点は入会日より起算す」とあり、年間を通じて日に複数回も登山することを求めている。



図7 『神戸ヒヨコ登山會 5周年記念号』表紙

そしてこの会は、5年間の活動を総括して、会が時代、社会と寄り添って成長してきたことを語っている——「おもえば我會の成長は時勢と広き階級の要求にてんらく纏絡していた。我等は先づ時勢の要求に応じて生まれた我會を想って見ねばならない。人間には不断の旺盛な事業熱を持続し得ないのだ。日々年々大きくは生涯を通じてその活動熱の台頭は周期的であり間歇的である。休憩は自然に生じたのだ。近年社会文化の発達かんけつは人をして神経衰弱の細密へと平常の仕事を導いた」と。そして人間の精神安定を図るためには休憩が何よりも急務であると説く。「人々は何としても休憩の時間を以て自然復帰の健全な精神的肉体的欲求を充足せねばならない。病的な遊樂は決して休憩を意義づけたものではない。徒歩や登山や我々を自然へと開放して疲労した神経を沈静正当へ戻し而して来るべき活動熱高潮時に社会の現象を正確に見、且つ真剣に見て自己の進むべき方途を決し、果敢勇敢なる奮進をなすべきである」。そして「我ヒヨコ登山會が及ばずと雖も実にこの使命自覚の上に生まれ且つ活動してきたことを思えば今日の発展が不自然でなかったことを思われるのである」と総括されるのである。

休憩がこれまでにないような深い意味でとらえられていることにも注意してよい。「意義ある休憩を知らぬ事業家は常に事業の末梢まっしょうに捉われ弊害に墮して自己を罪惡に落とし社会を毒する端正な風格を持ち意義ある活動により人類の文化に盡すべき事業の一端に坐す人をこそ我等は讚美する。金銭や口腹あくせくの欲を追うてこれ日も足らぬ市井の齷齪者流から見れば我々の集団が又我々の活動がじぎ兒戯に類し或は無意味な奔走に見えるかも知れない。然し人間最高の義務を知り又その義務を勇敢に果たそうと欲する者は我等が登山會の光榮ある一會員であることを喜び且つ登山會の使命の下に活躍する従順なる使徒であることに満足するであろう」とまで言い切り、徒歩活動の精神性に裏づけられる社会性をも強調している。そして、「然しこの急激な発展にも理由がある。我會が有閑階級の遊びを排し前述の使命遂行に向かって発足し質実剛健を以て方針と定め今に厳守実行に努めて居ることである」と断言するのも根拠があつたのであった。

この会は、大正11年10月5日に創設され、「時恰も紅葉將に錦を織り出さんとするの候扇港、湊東の一角に呱呱の声を挙げました。当時の會員十名！！そして署名簿を再度山仁王門前の善太郎茶屋に置き前記五日に初登山を挙行したのであります」とその活動をはじめた。そして會員の多くが同じような悩みを抱えてい

たのであった。「実は私の職業が座食であったため其の職務が忙しければ忙しい程運動が出来ない為に運動不足…それが嵩じて神経衰弱…それでいろいろ是れが救済の道を考えてが相当年齢をしめた。黎明、僅かの時間に運動と新鮮の空気を吸収するの両得を得る」とあるように、早朝のわずかな時間を割いて徒歩活動に当て、病める肉体を養生し、弛緩した精神を活性化していったのであった。

そしてスポーツとしてウォーキングの簡便さがその活動を助長する大きな要素にもなっていたのは言うまでもなからう。「他の運動の如く相手も入らねば何等の器具や経費を要せず且つ年齢にも何等の制限なく老幼でも婦女子でも思いの儘に挙行することが出来る、これぞ真に我等の求むる健康への最大簡易法である、そして只に我等座食者のみならず、常に活動を続ける方でも都會の汚れに汚れた空気中の活動は他日身を亡ぼすの危に陥るの恐れがないとも云えぬ、それで是等の方をも勧誘して、偉大なる山の自然に接しめ、然して新鮮なる空気の吸収を与える事が、体育上如何に効果を与えるかを想い、茲に同志と相語らった結果本會を設立することになったのであります」[傍点は筆者]と、設立の趣旨を語っている。

会員数の急速な伸びは、1年目には190名、2年目は460名、3年目は715名、4年目は980名、5年目は1275名となり、5年間で6.7倍もの伸び率となって表れている。そしてこうした会員数の増加は、「近頃都人が保健衛生の道に追々知識が発達し、心身の鍛錬には大自然に親しむことの最も有効なるに醒めて、登山熱の益々向上は誠に時代の要求であり又甚だ喜ばしきことであります。思うに今や都人の過半は文明と云う病原により神経衰弱を初め種々の疾病に罹り乃至はこれが為の一つこそなき大切な命さえも捨てた人は決して少なくないのであります」といった危機感が裏には



図8 『ベダスツリヤン 25周年特集記念号』表紙

隠れていたものであった。

最後に、ほかの徒歩会が発行していた機関誌のいくつかをあげておきたい。『鶏鳴』神戸鶏鳴徒歩会（創立大正7年）、『野歩路趣味』神戸野歩路会（創立大正5年）、『岳友』神戸岳友会（創立大正9年）、『ヒヨコ』神戸ヒヨコ登山会（創立大正11年）、『ダイヤモンドタイムス』神戸ダイヤモンド登山会（創立大正12年）、『つくばね』神戸突破峰嶺会（創立大正11年）、『ザクロ趣味』日本ザクロ会本部、『菊水』菊水毎日登山会、『K・H・C』神戸ハイキング倶楽部、『白樺』白樺山岳会、『ハクバ』神戸白馬登山会、『時報』神戸旭山岳会、『会報』神戸アユモウ会など枚挙に暇がないほどである。こうした機関誌のなかでも H. E. ドントが発行していた英文雑誌 *Inaka* は、今日では世界的に知られたり、神戸という地域研究にとどまらず、文化史研究の貴重な資料となっている。

III 塚本永堯の精神性

神戸徒歩会の主唱者、塚本永堯は住友銀行本店外事に勤務する実業家であったが、日本基督教団神戸教会の初代牧師、松山高吉（1847-1935）の義弟にあたり、敬虔なキリスト教徒でもあった。諏訪山山麓にある中村村の庄屋、塚本伊左衛門、やす夫妻の長男であり、長女つねが松山高吉に嫁いでいた。永堯の精神的環境にはキリスト教的要素が色濃くあったことは注意しておいてよい。この永堯には日本山岳会の機関誌『山岳』（第5巻2号）に発表した「山上詣」（「行者参り」という一文がある。山上ヶ岳（1719メートル）の参籠所をめぐる五日間の旅を記録した作品であるが、紀行文のかたちをとりながら自然との対峙を通して、自己の観照を描き出したエッセイになっている。この一文は仏教とキリスト教が信仰心のなかで混交した明治過渡期の知識人の肖像を示すものでもある。*Inaka* に寄稿した英文著述、残された英文を見ても、永堯が



図9 塚本永堯（『近代日本と神戸教会』, p. 41.）

英語に対して異和感を抱いていないどころか、積極的に接そうとする態度をうかがうことができる。そうした永堯が目指した山上ヶ岳は、金峯山、大峰山とも称され、奈良の吉野に聳え、山岳霊場として有名な聖山である。初夏から彼岸までの登拝行は、山上参りと呼ばれ、庶民信仰の対象であった。なお、永堯の同じ紀行文は英語でも書かれ *Inaka* に投稿されている。

「山上詣」が明治以来の情景文の形をとりながらも、かなり潤色をほどこした主観を前面に押し出した一作品になっているのは、冒頭部から明らかに看取できるであろう。では、「山上詣」を詳しく分析し、その内実を検討してみたい。

紀行文「山上詣」は、午前五時八分、「暁の停車場」である三ノ宮駅を出発する上り列車に同乗した客の描写から筆が起されている。未知の人から「失礼ですがあなたは斉藤さんではありませんか」、「神戸新聞の溪舟さん」ですか、と立てつづけに質問される。この溪舟とは雑誌『明星』などに詩歌を投稿し、神戸新聞記者として麗筆をふるっていた溪舟、斉藤徳一郎のことである。著書に『俳句狸毫小楷』（1900）、『評傳俳諧二百年史』（1911）などがある俳人でもあった。

この俳人と間違われた話題が冒頭におかれ、エッセイは展開していく。「溪舟先生がお聞きになったら、さぞご迷惑」かも知れないが、と留保しながらも、「文筆で渡世」する記者とまちがえられたことを永堯は「果報」と喜び、「携え来れる採集ガバンの外、我詩囊に何物か拾い集めて、紀行文を綴る材料にしよう」と決心した」と熱い心情を吐露する。しかも、「ただし溪舟先生の筆にあやかっ」と追記までしている。つまり永堯は溪舟の筆を借りて、旅の詩境を描き出そうとしているのである。ここで永堯が従来の紀行文ではなく、自己の信仰も含めた黙想の一端を開示しようとする姿勢をみることができる。

さて、ここで言及されている二つのことに注意を向けておく必要がある。それは旅人が携帯する「採集カバン」と「詩囊」に対して、である。前者は熱心な植物採集者には、「押し花に使用する古新聞」とともに必携品である。具体的には「採集カバン大小二個」、「押し花プレス新聞および厚半紙など、大小取混ぜ六個」という荷物を指す。後者については、むろん荷物ではなく、永堯のうちに宿る詩想である。そして忘れてならないのは、永堯のなかでこの両者が不可分なかたちで結びついていることである。永堯は和漢の古典のみならず、ヴィクトリア朝時代の英詩にも通暁していた。この作品のなかに引用されている桂冠詩人テニ



図10 植物を観察するルソー

ソン、エマソンの詩作品は、恣意的に挿入されたような不自然さなどまったくなく、きわめて適切な修辭を果たしている。否、それどころか、永堯自身の思索をより深化し、具体化する表現を獲得していると言わねばなるまい。

この一文のなかで見られる永堯の植物採集には、哲学者ジャン・ジャック・ルソー（1712-78）が散策をしながら植物に対して試みた対話と同質の精神性を認めることができる。ルソーはウォーキングについて、「歩行はたえず私に生を与え、思考を活性化させる。身体を静止していると思索できない。私の精神を動かすには、身体が動いていなくてはならない」（『告白』[1781-88] 第4巻）とまで主張している。ルソーがまさに「近代ウォーキングの始祖」と称されるゆえんである。そしてルソーは散歩において、自然観察の喜びをも示唆している。「快い風景を目にするといつもそうであるように、喜び、好奇心に胸をはずませながら歩くのだが、ときに立ち止まって、野の草を観察する」と、野原のごくありふれた雑草に対してもルソーは「いつもこころはずませる」のであった。ルソーの最晩年に書かれた『孤独な散歩者の夢想』（1782）には植物との対話がいかに濃密な思索を与えてくれるか、余すところなく語られている——「輝くばかりの花々、色彩豊かな野原、さわやかな緑陰、小川、茂み、草原。恐ろしげなものを見て嫌な想像でいっぱいになった心を、こうした眺めが清めてくれる。世間の一大事にも無関心になってしまった私の心は、もはや感覚に訴えるものにしか動かされないのだ。もう、私には利根的な感覚しか残されていない。五感でとらえない限り、苦しみも、喜びも感じなくなってしまったのだ。身近にある感じのいいものに心を寄せ、それをじっと見つ

め、観察し、比較し、最後に分類する。こうして私は突然、植物学者になった。自然を愛する理由を次々と見つけ続けていたいという、それだけのために、自然を研究する。そういう意味での植物学者だ」と、全人的に自然と向かいあわなくては生きる意味をつかめないという。永堯もまたこうしたルソーの系譜に連なる「植物学者」である。

加えて、この一篇そのものには劇的な効果を生み出すためにたくましく構成しようとする虚構性も指摘しておこう。たとえばダンテの『神曲』になぞらえていえば、旅人が吐き気を伴う激烈なる腹痛に陥るのは、あたかも「煉獄篇」に相当するとでも言えようか。「案内が帰ってから、床につこうとしたが、腹痛を感じた。初めはさほどでもなかったが、段々痛みが増し加わって、遂には吐瀉するのみか、甚だしく下痢して、ひどい胃痙攣を起した。胃の痛むのは初めての経験であるから、非常に苦痛を感じた。幸に医師が近傍きんぼうにあった故、すぐさま、迎えたが、服薬しても一向ききめがない。夜の九時ごろから、翌朝の四時ごろまで、七転八倒の苦しみをして、吐き下し続けた」と腹痛の描写が続く。そもそもこうした永堯の一連の苦痛を考えると、ダンテ『神曲』の「煉獄篇」が *Purgatorio* と称されていることを思い出しておこう。苦行の場で「吐きもどし、清める」(‘purgatory’) ことが、原義となっているのである。こうした古典との符合に注目しておきたい。

やがて腹痛がおさまり、「この恐ろしい芳山の一夜を思い出すごとに、今でもゾツとする。行者が齋戒沐浴して御精進で登山するのは、真に意味のあることを悟った」とあるように、「オゾンに満ちた山の空気が病的精神に非常な刺激剤」となり、旅人はいよいよ「煉獄篇」の終盤へと道行きを進めていく。「三四回休息した後、とうとう本堂に着いて案内を乞うたが、方丈さんご自身に出て来られた。ただちに白湯を求めて、四五杯続けさまに飲み干した時、初めて白湯の味を悟ったが、誠に甘露よりも甘い思いがした。大に元気を回復して、お寺の宝物をいろいろ拝見した」と快癒の途上で、寺社を参詣する余裕がようやく生じてくる。

まず小森水分神社に詣で、次に金峯神社まで歩を進めていき、「雲を衝いて群山の上に聳えている」高見山、遠くには金剛山、高野山を望む。そして、「百丁目茶室」で早い食事を摂る。「昼飯にはまだ早かったが、出来立てのがあるからとて病氣以来初めて、米の飯を食したが、此結構な豊葦原の瑞穂の国に生まれて、米ほど有難いものは無いという事を初めて知ったのも

仏陀の恵み！」とあるように、日本人としてこの旅人には生来の仏教信仰がまず流れていたことを留意しておこう。

やがて旅人と植物との出会いがある。「蛇原茶屋」に到着し、「この原で有名な『エレン草』を一株、鬼人(形相が恐ろしい茶屋の老人)から頂戴してカバンの中の珍草の数を増した」とあるように、「エレン草」を入手している。これまでも小森水分神社で「蔓竜胆つるりんどう」、「石楠花しゃくなんげ」を観察している。かくのごとく永堯は植物採集に余念がない。

やがて旅の目的地のひとつ、「鐘掛岩」へとたどりつく。「岩は中々大きなもので、攀じ上るのに、一寸骨が折れる。新参の行者の或者は、上るのにぶるぶる慄って、三人掛りで、漸く岩の上へ押し上げるそうで、これが、表の行の難所の第一である。鎖が二筋ほどつけてあって、その一つをたよりに上って見たが、断食のおかげで、身が軽くて、難なく上れた。しかも靴ばきで。吉野ホテルで不浄のものを『吐き下し』せなかったならば、この行場で、転げ落ちて大怪我をしていたかも知れない。して見ると『恐ろしい芳山の一夜』は身に取って、思い設けぬ幸となったので、人間万事塞翁が馬とは真によく言ったものである」と愉快に語られているが、この一節から旅人が「煉獄篇」から「天国篇」へ移行していくような思いがする。やがて、「鈴鹿山脈の余波」、「多武峰等の群峰」、「吉野川の溪谷」、「葛城山脈の生駒、信貴、葛城及び金剛の群山」をはるか遠方に仰いでいるうちに、見えないはずの六甲の峰を想起してしまう。日頃、神戸徒歩会の活動のなかで散策している市背の山々がここで連想されてきて、思わず「摩耶の山、茅渚の海、げに恋しやな、ああ我故里！」と詠嘆の念をつつみ隠そうとはしない。

そして、一輪の「淋しそうに」「笑っている」竜胆がふと目に入ったのを契機に、「『鐘かけと問うてたづねて来て見れば 九穴の地蔵を下にこそ見る』それから少し行くと、案内はかしこまって、『これなるは紀伊の国熊野に通う御亀石——御亀石ふむな叩くな、よけて通れよ旅の新客』』といった感慨に襲われる。これらの引用はすべて『大峯修行記』に依拠している。

やがて行場の最難所「西の覗岩」に到着する。「案内の爺は半ズボンをしめている革帯に両手をかけて、この新客の身を宙に吊り上げた。両手でしっかり岩を拝めという。いうがままに拝むと、南無三宝、我胴と両足は岩をはなれてあたら、名古屋の城の屋根の鯨立ち！革の帯が切れるか、体がすっぽりぬけたら南無大菩薩！ジイザス ケライスト！千尋の谷底へ転げ落ち

てこな微塵！」とあり、生死をかけた行の最中に期せずして仏教とキリスト教とが混交してしまい、思わず大声で叫んでいる姿に読者は微苦笑をさそわれてしまう。六甲山を隈なく散策して自己を見つめ直そうとした永堯の真骨頂をここに見る思いがする。英文で書いた同じ紀行文には山上ヶ岳から六甲の連峰を見つめてみたいと記されている（“It had long been the writer’s cherished desire in his daily walks on the Kobe hills to climb, one day, the Kongo, the highest peak of the range, so as to take a bird’s-eye view of our so-called Rokko Range on this side of the bay.”）。

このエッセイにおける花卉の象徴性についてはすでに触れたが、花との対話を通じて永堯の「歩^{ウォーキング}の精神性」が十全に開示されていく。まず永堯は六甲山の道路修繕というキリスト教徒らしい営為に着手する。そして自ずと山に咲く花を愛でるようになり、花との対話から「歩行の意味」が明らかになってくるのである。ここに「山上詣」がありふれた紀行文ではなく、黙想の一篇と見なすことができる。

さびしい塵寰^{じんかん}をはなれた山奥で、一番うれしいのは、人と草との神秘的関係のあるという観念の起ることである

“—— if the sages ask Thee why
This charm is wasted on the earth and sky,
Tell them, dear, that if eyes were made for seeing,
Then beauty is its own excuse for Being:
Why thou wert there, O rival of the rose!
I never thought to ask, I never knew:
But, in my simple ignorance, suppose
The self-same power that brought me there, brought
you.”

しかし天然はいつまでも、「よそ行きの着物」を着ておらぬ。兎角する間に、濃霧が大天井の方から来て、我が「破岩」の周囲まで襲うた。またたくまに天地は暗黒の支配する所となったので、案内を促して早速、参籠所の東南院へ帰った。

「人と草との神秘的関係のあるという観念」は、ここで引用されているエマソンの、ニューイングランドやカナダで生える灌木で赤紫の美しい花を咲かせる植物を歌った詩句（「ロドーラ」[‘The Rhodora’]）に適切に表されている。英語の原文で永堯が引用している部分を日本語に移しておこう。

「ロドーラよ！」もし賢人がなぜそのような美が空しく天と地に放たるのかと汝に問うならば、眼は見るために造られしものならば、美もまたみずから存在する理由があるのだ、と応えたらいい。

おお、薔薇のライヴァルよ、なぜ汝はそこにいたのか

聞こうともせず、また応えも分らなかったが、わが無知でも分るのは

我を導きたもうた力が、汝もみちびいた、と。

エマソンは忠実に自然を描きなぞらえようとした作家ではなかった。自然を賛美することでは人後に落ちなかったが、自然そのものを愛でるような作家ではない。宇宙や自己を凝視するための媒体として自然に対峙したのである。むしろ自然に隠された自然（本性）を求めたのであった。エマソンの自然はきわめて観念化された自然ゆえ、自然などどこにも見えていないという逆説さえ生じてくる。こうしたエマソンの観念化された視線を図像化した、きわめて示唆的な戯画がある。エマソン自身が森のなかで、透明な眼球となり、自然と対峙しているうちに神秘的合一を果たし、「私」は無化してしまい、あるべき普遍的存在、事物の本性を見出していくのである。きわめて意識化されたこうした「神秘的関係」こそ、永堯が希求したものであった。



図11 エマソンを描いた戯画「透明な眼球」

さらに、永堯の紀行文には別のところでもエマソンの詩が引用されている。訪ねた寺で揮毫を求められて認めたのであるが、それがエマソンの詩「花蜂」(‘The Humble-Bee’)の一節である——

Wiser far than human seer,
Yellow-breeched philosopher!

Seeing only what is fair,
Sipping only what is sweet,
Thou dost mock at fate and care,
Leave the chaff, and take the wheat.

煩わしさばかりを抱えこんで身動きできない人間と、身軽で何の憂いもない蜂を比較して描き分けている。つまり蜂は自然の無垢さを象徴しているのだが、ここでも「見る」という行為がきわめて印象的である〔斜字は永堯による〕。

ここで永堯の紀行文へもどろう。「三角台から西南に進むと、お花畑に出た、一面に熊笹が生えていて、所々に竜胆や風露草などが、咲いているだけで、携えて来た採集カバンの口腹を満たすに足らず、いささか不平である。この行、植物採集は時期をおくれているから全く失敗に終わった」と相変わらず花にこだわりながら、永堯は歩を進めていく。そしてやがて、「水の流れる断音」が「遠雷のように起きて来る」音以外何も聞こえない静寂につつまれる。こうした一節を読むと永堯が聴覚の人であると感じられるが、また視覚にも鋭い人である——「蜿蜒伏起きする連嶺から、立ちのぼる雲の面白い形が、夕日を反射して、青い空と一種の微妙なる色の配合をたもちながら、まばゆい日輪を覆うと、下界の幽谷はために輝いて云うに云われぬ美観を呈した」とあるように、「色の配合」の精妙さを見極めることができる人でもあった。

やがて空一面に広がる天の川を眺めて、永堯は初めて「俗界を脱して」、自らが「聖所まで向上していること」を自覚するに至るのである。これまで植物と対峙して自己を観照し、たえず帰依する対象を模索してきた永堯は、地上から解脱し、「星の森」のなかで輝く星という名の花に安逸を見出していく——「ああ、この星の林が幾千年の昔のある一夜、初めてかように立派に現れたとすれば、下界に住む人々はいかに驚き且つ恐れて礼拝したであろう。当時の歴史家は世界の歴史に特筆大書して、『某の年某の月某の夜極楽浄土のかげを蒼空が現出して、時ならず不夜城の美観を呈した』と、子々孫々後の世まで伝えたであろう。しかもこれら御星の花は夜な夜な宇宙を飾って未来永劫不思議な『法の光』を放っている」と、自らの宗教的宇宙観を語ってやむところがない。

そして静謐そのものの中に自己を置くのである。「この卑しい汚れた体も、かような浄土にまで向上すれば、するほど霊界に近寄って、自然、限界も高くなり、宇宙につける観念も、層一層聖別せらるるの感じ

がした。竹林院で吹く尺八の音が、静かな夜の空気に伝わって、木だまに響いている。鳴く虫も意味ありげに聞こえる」——これぞ永堯が求めた「天国篇」ではあるまいか。

永堯の前には、「地平線上に旭が現れる前、光が線上の雲に反射して、誠に美しい朝景色」が広がる。そしてこの小品のなかでもっとも印象的な描写が続く——

暫くして雲が朝日を覆うた。すると秀嶺を浮ばしている「霧の海」に御光がさしていうべからざる偉観を呈した。

The Peak is high and flush'd
At his highest with sunrise fire;
The Peak is high, and the stars are high,
And the thought of a man is higher.

ここに引用された適切な一節は、テニソンの「声と峰」(‘The Voice and the Peak’) の第8スタンザからの引用である。こうした引用を即座にできるのは、永堯がいかに英詩に通じていたかを証していよう。

この紀行文は、「案内と稲田の畦に憩うているとテクサリの赤い花が、背競べをして、咲き競うている。蝗が二疋、穂に絡みついて、ブランコを始めている。小川の水は、せわしようにちよろちよろ流れて行く。『イザ我も行かん。案内』竜尾に出たら一匹の和犬が、不意に大声で吠えついたために、吃愕して妄想の鎖を断ち切った」という一文で結ばれる。犬の鳴き声で大峰山で紡いできた夢がついえるところで閉じられるのだが、現実と想像の世界の境が消失して、ひとつの物語が完成するというのは伝統的な夢物語という文学的な枠組みに依拠しているといえよう。こうした枠物語という文学的な技法を援用していることを考えても、永堯はかなりの文学通であったと言わねばなるまい。

この紀行文から確認できたように、歩くことは、肉体を全面的に参加させる運動だけではなく、意識を解放することにもつながっていく。次なる一步をどのように歩み出すか、それは瞬時の判断を要し、頭脳を活性化し、よどんでいた意識が覚醒してくる。そして歩行数に比例して、酸素の新陳代謝が全身で行われ、身体全身で呼吸をしはじめる。

さらなる歩行を重ね前進していくと、目の前に展開する光景は読み換わっていく。名所旧跡をみれば、たちまちのうちに記憶がよみがえり、歴史の回路が拓かれていく。遠い過去がよびもどされ、さらなる連想を

生み、止めどない精神の活劇が展開されていき、歩くごとに、ひとつの世界が形づくられていくのである。

結びにかえて

「神戸ヒヨコ登山会」の第71回例会として、上筒井駅に集合し、六甲山の開祖、アーサー・ヘスケス・グループ（1846-1918）の旧邸を訪問する徒歩会が50余名の参加をえて行われた。その報告記のなかに、グループの事績が検証されていると同時に、背山におけるウォーキング活動の本質がいみじくも要約されている——「三度の食事より山野^{ぼっしょう} 跋涉の好きな翁 [グループ] は、六甲連山秀麗の気に親しみ重ねるにつけ文明国の体面上誇るに足る公園を有しない阪神地方の人士が背後の自然に冷淡なるを遺憾とし五十歳で閑地に就くや野心^{うつぼつ} 鬱勃、直に多数の人夫を督し西六甲の頂上を拓いた。須斐にして忽焉と碧瑠璃の空、新緑の山に点出された白色の洋館…これぞ六甲開拓の第一歩で其の後、山林の開拓新道の開鑿^{かいさく}、山の市民勧誘、別荘新築の斡旋等献身的努力の賜は外人側より六甲山市長の敬号を」奉られたという。一世紀以上にわたり六甲山で展開されてきたウォーキング活動を顧みれば、グループの「野心」は十全に結実した、と結論してもいいのではなかろうか。

ここにグループを開祖とする背山におけるウォーキング活動の歴史的な展開の一端は理解できたのであるが、その精神性の真髄を示唆して本稿を締めくくりたい。神戸徒歩会が15周年を迎えようとするとき、会員のひとりである三木高岑が「徒歩会の伝統的精神」と題する一文を投稿している。

高岑は「孤独が好きで」ひとり山野を散策することを愛好すること二十年、六甲の山中を歩いていると神戸徒歩会という文字が入ったペンキ塗りの標識、道案内をよく見かけるようになった。神戸徒歩会という存在に興味をもつうちに、会の噂を聞く。「…ところが話しに聞くと、その会は金持ちでなければ会員の資格が無い、立派な紹介者が無ければ入れないとか云うことを耳にしました。それで私はツイ考え違いをして、此の天興の楽園を我が物顔にするかの如き徒歩会の態度に不快の念が起きました」と、徒歩会が社会的な地位にものを言わして六甲山の自然を占有しているのではないかと曲解してしまうのである。

高岑に転機が訪れたのは永堯との邂逅であった——「初めて遠足に参加したるは忘れもせぬ大正9年5月の暑い日でした。その時は武徳殿集合で天王から城ヶ

越、鍋蓋、再度へのコースで参加者としては塚本さんと私の二人きりでした。私はその黴いのを意外に思いました。そして途々塚本氏から泌みじみと會の生い立ちから現況、将来等の御話しを承りました」。永堯の直話から神戸徒歩会の活動に賛同した高岑は、いつか會員が何れも高潔な人士であることを知り、自らの不明を恥じるようになる。「こんな動機から會の一員となった私は皆様と御馴染を得まして以来、徒歩會の空気が如何にも和かで心持の好いことを喜びました。また會員の方々が何れも皆人格者であり、美わしい真情の持主であることを嬉しく思いました。中には傲岸^{ごうがん}だと思ったり、出過ぎ者だと感じた方もありますが、よくよく交際して見ると前者は温厚篤実な紳士であり、後者はまことに世話好きのよい方であったりして、私は自身の浅薄な皮相観を愧じるようなこともありました」と、自らの不明を恥じる結果になったのである。

神戸が居留地という異国文化を背景に発展した都市であったとはいえ、当時の神戸の一般市民は外国人に対して少なからず違和感を抱いていたはずである。ところが、「殊に本會の特色として国際的にも色取りがあるにも拘らず [昭和2年、會員総数780名のうち外国人は230名である]、之等がよく渾一融和して和氣^{あいあい} 藹々たる一大集団を作って居ること」を高岑も不思議に思い、その根拠、すなわち精神的な連帯感を生み出すものは何かと考えた末、それは「吾徒が明け暮れ渴仰して已まない自然禮讚の表現ではないか」と思い至る。人種の境界をも凌駕する精神は、「偉大なる自然は此の汚濁せる世に唯一つ自然美と標榜を以て吾人の醜き魂を浄化し、お互いの純なる心と心を堅く固く結びつけてくれます」という自覚から発していたのである。そして、「わが徒歩會の本領は、真面目なる自然観よりして精神肉体の培養を図るにあると考えます」（神戸徒歩會機関雑誌『ペデスツリヤン』第78号 [大正14年8月25日]）と高岑は結論している。

六甲山において百花繚乱の様相を呈した徒歩会の活動は、自然と一体になり心身の練達をきわめるといった共通の理念をかがげていたのである。表面的には宗教、社会的階層、信条などの相違があったにせよ、歩くということについて共通の韌帯を有していた事実は、注目するのに値するのではなかろうか。神戸徒歩会の六甲山での活動は永堯たちの尽力を得て、市民のスポーツにまで昇化されていくのである。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、貴重な蔵書・資料を貸与

して下さった兵庫県立西宮高校教諭、石戸信也先生に、また再度山の善太郎茶屋に置かれていた大正12年の『登山記録簿』をご教示下さった神戸登山研修所所長・兵庫山岳連盟事務局長、杉本雄一氏に、謝意を表しておきたい。

参考文献

- 『ペデスツリヤン』（神戸徒歩會 [関西徒歩會]，第56号-第155号）
 『山岳美』（日本アルカウ會，日本婦人アルカウ會，大正11年）
 『神戸ヒヨコ登山會五周年記念号』（神戸ヒヨコ會，昭和2年）
 落合重信『神戸裏山登山史略』（神戸市レクリエーション協会，1963）
 齊藤幸吉「KWSの二十五年」『ペデスツリヤン 25周年特集記念号』（関西徒歩會，昭和10年）
 棚田真輔「ペデスツリヤンと関西徒歩會—六甲山を中心とする登山界—」『ケルン解題』（アテネ書房，1991年）
 棚田真輔，表孟宏，神吉賢一『プレイランド六甲山史』（出版科学総合研究所，昭和59年）
 塚本永堯「山上詣」『日本山岳風土記 第7巻 近畿の山々』（宝文館，昭和35年）
 津田周二編『毎日登山発祥の地 善助茶屋』（神戸登山研修所，1978）
 中島俊郎「ペDESTリアニズムの諸相—18世紀末ツーリズムの一断面」『甲南大学文学部紀要 第140号』（2006）
 ———『詩想を求めて田園を歩く—ペDESTリアン・ツアー—』『イギリス的風景—教養の旅から感性の旅

へ』（NTT出版，2007）

- 「ウォーキングの文化史—イギリス人はいかに歩き，何を生み出したか」『甲南大学総合研究所報 第50号』（甲南大学総合研究所，2010）
 ———『ヴィクトリア時代の湖水地方案内』（ユーリカ・プレス，2013）
 日本基督教団神戸教会編『近代日本と神戸教会』（創元社，1992）
 宮崎湖處子『ラルヅワルス』（民友社，明治26年）
 Hilaire Belloc, *The Road* (Fisher Unwin, 1924)
 Ralph Waldon Emerson, *The Poems of Ralph Waldo Emerson* (Houghton Mifflin, 1904)
 Donna Landry, “‘This Lime-Tree Bower’ as Walking Poem,” *The Invention of the Countryside* (Palgrave, 2001)
 Sinclair McKay, *Ramble On: The Story of our Love for Walking Britain* (Fourth Estate, 2012)
 Toshiro Nakajima ed., *Lake District Tours at the Victorian Age 1842-1902* (Eurika Press & Maruzen, 2013), 5 vols.
 Rebecca Solnit, *Wanderlust: A History of Walking* (Viking, 2000)
 Ian Thompson, *The English Lakes: A History* (Bloomsbury, 2012)
 [Nagataka]. Tsukamoto, “Crossing the Kongo Mountain,” *Inaka: or Reminiscences of Rokkosan and Other Rocks* (Kobe: 東洋広告取次会社, 1917), vol. VII, pp. 67-71.
 [Nagataka]. Tsukamoto, “The Old Tokugawa Road,” *Inaka: or Reminiscences of Rokkosan and Other Rocks* (Kobe: 神戸ヘラルド新聞社, 1919), vol. XI, pp. 33-37.

[付録 永堯が引用したエマソンの詩2篇の全文を以下に示しておく。なお、ゴチック体になっている部分が引用部分である]

The Humble-Bee

Burly dozing humblebee!
Where thou art is clime for me.
Let them sail for Porto Rique,
Far-off heats through seas to seek,
I will follow thee alone,
Thou animated torrid zone!
Zig-zag steerer, desert-cheerer,
Let me chase thy waving lines,
Keep me nearer, me thy hearer,
Singing over shrubs and vines.

Insect lover of the sun,
Joy of thy dominion!
Sailor of the atmosphere,
Swimmer through the waves of air,
Voyager of light and noon,
Epicurean of June,
Wait I prithee, till I come
Within ear-shot of thy hum,—
All without is martyrdom.

When the south wind, in May days,
With a net of shining haze,
Silvers the horizon wall,
And, with softness touching all,
Tints the human countenance
With a color of romance,
And, infusing subtle heats,
Turns the sod to violets,
Thou in sunny solitudes,
Rover of the underwoods,
The green silence dost displace,
With thy mellow breezy bass.

Hot midsummer's petted crone,
Sweet to me thy drowsy tune,
Telling of countless sunny hours,
Long days, and solid banks of flowers,
Of gulfs of sweetness without bound
In Indian wildernesses found,
Of Syrian peace, immortal leisure,
Firmest cheer and bird-like pleasure.

Aught unsavory or unclean,
Hath my insect never seen,
But violets and bilberry bells,
Maple sap and daffodels,
Grass with green flag half-mast high,

Succory to match the sky,
Columbine with horn of honey,
Scented fern, and agrimony,
Clover, catch fly, adders-tongue,
And brier-roses dwelt among;
All beside was unknown waste,
All was picture as he passed.

**Wiser far than human seer,
Yellow-breeched philosopher!
Seeing only what is fair,
Sipping only what is sweet,
Thou dost mock at fate and care,
Leave the chaff and take the wheat,**
When the fierce north-western blast
Cools sea and land so far and fast,
Thou already slumberest deep,—
Woe and want thou canst out-sleep,—
Want and woe which torture us,
Thy sleep makes ridiculous.

The Rhodora

On being asked, whence is the flower.
In May, when sea-winds pierced our solitudes,
I found the fresh Rhodora in the woods,
Spreading its leafless blooms in a damp nook,
To please the desert and the sluggish brook.
The purple petals fallen in the pool
Made the black water with their beauty gay;
Here might the red-bird come his plumes to cool,
And court the flower that cheapens his array.
**Rhodora! if the sages ask thee why
This charm is wasted on the earth and sky,
Tell them, dear, that, if eyes were made for seeing,
Then beauty is its own excuse for Being;
Why thou wert there, O rival of the rose!
I never thought to ask; I never knew;
But in my simple ignorance suppose
The self-same power that brought me there, brought you.**